平成20年度　研　究　総　論

研究主題	**自分らしくなる**
本年度の研究の視点	**・教師は自分を問うていく子どもにどう関わったか**

“子どもは、よりよく生きようと成長の芽を自ら伸ばしていく。”

この子ども観のもと、私たちは、自ら成長しようとしている子どもが自分を問い、自分にとっての真理を明らかにしていくことを支えようとしてきた。子どもが、自らの内にある見方・感じ方・考え方を問い、確かな一歩を踏み出していく。そんな子どもの姿を“自分らしくなる”姿として、私たちは願っている。

1．私たちの考え　研究主題“自分らしくなる”に込めるもの

（1）子どもが“自分らしくなる”こと

子どもはこれまでの生活体験や学習経験の中で、自らの見方・感じ方・考え方を培っている。身のまわりにあるさまざまな事象に働きかけ、その事象に含まれる事実や理論（教材の本質にかかわる真理）にふれながら、子どもは、自らの見方・感じ方・考え方で事象を意味づけようとしていく。その子が、事象を意味づけていく時、その子は自分の見方・感じ方・考え方を問う。自分を問い、自分にとっての真理を明らかにしたその子の考え、行為、表現、動き方は、その子ならではのものとなる。こうして、自分にとっての真理を明らかにしたその子は、自らの見方・感じ方・考え方を確かにする。自分を問い、その子の内で、その子の見方・感じ方・考え方が確かになるからこそ、その子は「自分らしくなる」のだ。

私たちは、教科、教材の中で、その子が自分らしくなることを願い、教材を生み出してきた。子どもは教材に含まれる魅力に惹かれ、「なぜだろう」「不思議だな」「もっと知りたい」と感じ、対象に働きかけていく。自らの見方・感じ方・考え方で、対象に働きかけたり、対象から、自らの見方・感じ方・考え方に働きかえされたりする中で、考え、行為、表現、動き方を生み出していく。くり返し対象へ働きかけていくことで、その子の考え、行為、表現、動き方は、その子の意図が込められたものになっていく。

追究を進めていく中で、子どもは、教材の本質にかかわる真理や自分とは異なる他者の考え、行為、表現、動き方をきっかけとして、自らの見方・感じ方・考え方で対象となる事象を意味づけられないことを感じる。始めは違和感と言えるような小さな疑問かもしれない。しかし、対象への働きかけを強め、考え、行為、表現、動き方に自らの意図を込めてきた子どもだからこそ、その小さな疑問が、気になる。他からみれば些細なことと感じてしまうような小さな疑問にも、その子はこだわり、自ら生み出してきた考え、行為、表現、動き方を吟味していく。

自らの考え、行為、表現、動き方を吟味する中で、子どもは、「本当にこれでいいのだろうか」「自分はなぜそうしているのだろうか」「もっと、違うものができるのではないか」と、自らの内にある見方・感じ方・考え方を見つめる。子どもは、「今、自分がやっていることは、自分にとって、どんな意味をもつのだろうか」「自分が本当に大切にしたいことは何なのか」「自分はこれから、どうすべきなのか」と自分の生み出してきた考え、行為、表現、動き方と自らの内にある見方・感じ方・考え方とを行き来する。この時、子どもは、自らの内にある見方・感じ方・考え方を問う。自らの見方・感じ方・考え方を問うことで、「やっぱり、自分はこうしたいんだ」「私はこう考えるからこうするんだ」と、その子は、自分にとっての真理を明らかにする。その子が自分を問い、自分にとっての真理を明らかにすることが、その子にとって価値ある学びであると私たちは考えている。なぜなら、自分にとっての真理を明らかにしたその子の考え、行為、表現、動き方は、その子の意志の込められた確かなものとなると私たちは考えているからだ。

このように、その子が自分を問い、自分にとっての真理を明らかにしていく、それが、本校教育目標「自らをきりひらく子」の具現の姿であり、その子が「自分らしくなる」ことだと私たちは考えている。

（2）その子ならではの追究を支える教師

私たちは、学校生活全体の中で、その子の見方・感じ方・考え方をとらえ続ける。そして、その子が“自分らしくなる”ことを願い、教材を生み出していく。その子が、教材のどんな魅力に出会い、自らの見方・感じ方・考え方をどのように問うていくのか、その子の学びの道すじを思い描く。私たちは、“その教材で学ぶ”ことが、その子にとってどんな意味や価値をもつのかに踏み込んで願いをかけて、教材を生み出してきた。

追究の中でも、私たちは、その子の考え、行為、表現、動き方に、その子の見方・感じ方・考え方が

どう映し出されているのかを観ようとしてきた。その子の考え、行為、表現、動き方は、その子が自らの見方・感じ方・考え方で対象に働きかけることで表出している。私たちは、“その教師がその子の見方・感じ方・考え方を色濃く表出していると感じた表れ”をその子の『問い』と位置づけた。その子の『問い』をつないでいくことで、その子が自らの見方・感じ方・考え方をどう問うているのかを私たちは見極めようとしてきた。

しかし、子どもと追究をともにする中で、私たちは、子どもの表れにとまどうことがある。目の前の子どもの姿と追究前に思い描いていた姿との違いに「“その子らしさ”は、この追究の中で、本当に表れているのか」「子どもの姿から自分がとらえてきたものは違ったのか」と感じてしまうことがある。また、たとえ追究前に思い描いた通りの姿があったとしても、「目の前の子どもの姿は本当に追究をその子に委ねていたものなのか」「自分の関わりによって、その子の追究を狭めてしまったのではないか」と思い悩むこともある。それは、その子にとって“価値ある学び”を、その子の内にある見方・感じ方・考え方にまで踏み込んで支えようとするが故に、教師の内でおきてきたことなのだ。

そんな時こそ、私たちは目の前のその子の見方・感じ方・考え方が“今”どのような状態であるのかを見極めていきたい。その子が、今、自らの見方・感じ方・考え方をどのように問うているのかを見極めなければ、その子にとって“価値ある学び”を支えていく教師の関わりは位置付くことはないからだ。目の前の子どもの見方・感じ方・考え方が“今”どのような状態であるのかを見極めることで、その教師の“関わりの意図”もはっきりとするだろう。その時こそ、その子への願いは、その教師ならではの“関わり”となってしぼり出されてくる。どこまでも、その子の見方・感じ方・考え方をとらえ続けていくことで、その子にとって“価値ある学び”を支えることができるのだと私たちは考えている。

2．本年度の研究の方向　視点：「教師は自分を問うていく子どもにどう関わったか」

昨年度、「教材の本質が、確かな自分になっていくその子にどう関与していたかを追う」をひとつの視点として、“教科ならではの学びとは？”“教材で学ぶとは？”について、考えていった。教材の本質の関与を具体的に観ていく中で、「教材の本質がその子をどのように立ち止まらせているのか」「その子が自らの見方・感じ方・考え方をどのように問うているのか」といった関与を細かく観ていく必要性が浮かび上がってきた。

また、「教師は自分を問うていく子どもにどう関わったか」をもうひとつの視点として、教師の関わりを切り口に追究を観てきた。関わりを切り口にすることで、「その子の見方・感じ方・考え方が追究の中で、何に映し出されていくのか」「その子の学びを支えるために、その子の何に、いつ、どのように関わるべきか」を見極めていく必要性も浮かび上がってきた。

ふたつの視点で語り合う中で、「本時を迎える子どもの“今”の状態」が話題になった。それは、その子の見方・感じ方・考え方が“今”どのような状態であるのかを見極めなければ、その子にとって“価値ある学び”を支えることはできないからだ。その子は本当に立ち止まっているのか、どのように立ち止まっているのか、何に立ち止まっているのかなど、その教師が目の前の子どもの見方・感じ方・考え方が“今”どのような状態であるのかを見極めることで、その子への関わりは自然と位置付いていく。私たちは、目の前の子どもをどこまでもとらえ続けていくことでその子にとっての“価値ある学び”を支えていきたいという思いを強めている。

そこで、本年度は、視点を「教師は自分を問うていく子どもにどう関わったか」に絞り考えていく。教師の関わりを切り口に、追究における子どもの表れをつないでいくことで、その子が自らの見方・感じ方・考え方をどう問うていったのかを具体的に観ていくことになる。その子はどのように立ち止まっているのか、何に立ち止まっているのかなど、目の前の子どもの“今”の状態を見極め、その子が自らの見方・感じ方・考え方をどう問うていくことが、その子にとってどのような価値があるのかを思い描いていく。そうすることで、その子の学びの道すじはより確かになる。教師の関わりは、子どもへのとらえ、願いのもとにしぼり出されるものである。関わりを切り口とすることで、その子にとって“価値ある学び”はより確かなものになると私たちは考えている。

子どもの学びは、教科、教材の中だけにとどまらない。よりよく生きようと成長の芽を自ら伸ばしていく子どもたちは、日々身のまわりにある事象に働きかけ、自らの見方・感じ方・考え方を問うていくからだ。子どもは学び続けているのである。こうしたその子ならではの学びを重ねていくことで、子どもの学びは、その子の内側で生きる力または自らをきりひらく力となって、その子の成長を支えていく。

学校は、子どもも教師もともに自らを成長させていく場である。子どもに自らを問うことを願う時、教師もまた自らを問い続けていく。「自分らしくなる」という研究主題を立ち上げ、3年目となる本年度、私たちは、目の前の子どもの見方・感じ方・考え方が“今”どのような状態であるのかをどこまでも観て感じていきたい。そうしていくことで、成長の芽を自ら伸ばそうとしている目の前の子どもの“今”をとらえ、自分らしくなるその子をどこまでも支えていくのだ。「自分らしくなる」という研究主題に込めた思いを子どもの具現の姿として、どこまでも追い求めていきたい。